

エリザベス朝演劇のレビュー、「魔女」の娯楽性の生成

中野春夫

論文要旨

本論の対象は『マクベス』の「3人の魔女 (Weird Sisters/Three Witches)」¹⁾ など、17世紀初めのロンドンの舞台上で歌って、踊り、呪った魔女たちである。「きれいは汚い、汚いはきれい (Fair is foul, and foul is fair)」という「3人の魔女」の摩訶不思議な台詞や大釜煮込み、さらにはミドルトンの『魔女』におけるヘカテの宙乗りやベン・ジョンソンの『女王たちの仮面劇』での12人の魔女の合唱など、登場人物としての魔女たちを一躍有名にしたものはどこからどう生まれたのだろうか？ 本論は娯楽文化史という新たな脈絡から、17世紀初めの芝居小屋で魔女の娯楽性が発達していく過程を検証してみたい。

キーワード【英国ルネサンス演劇、魔女表象、シェイクスピア、娯楽文化史、トマス・ミドルトン】

1) 「三人の魔女」にかんする従来の論点

第1フォリオの『マクベス』テキストには第3幕第5場35行および第4幕第1場43行のト書きに断片的な謎の小唄が存在する。第1フォリオはその歌詞について出だしのリフレインだけを示し、それ以外の部分は「などなど (etc)」で省略している。

Hecate O, well done. I commend your pains,
And everyone shall share i'th' gains.
And now about the cauldron sing,
Like elves and fairies in a ring,
Enchanting all that you put in.

Music and a song. 'Black spirits, etc'

(F1 *Macbeth*, 4.1.39-43)

ヘカテ おお、よくやった。ほめてやるよ、
みんな、きちんと分け前をくれてやるよ、
さあ、大釜を回って、歌うんだ、
妖精たちが輪になって踊り歌うように。
釜に放り込むものすべてに呪文をかけるんだ。

音楽と小唄。「まっ黒い霊、などなど」

今日私たちが利用する編集版テキストのほとんどにおいてト書きの「小唄」は出だしの‘Black spirits’だけが記載され、残りの部分はすべて割愛されている²⁾。第3幕第5場も同様で、小唄の歌詞は出だしの‘Come away, come away’だけが掲載され、それに続く歌詞は不明である。謎の小唄の全容が判明したのは1674年、第1フォリオの出版からおよそ半世紀が経ってからである。劇作家ウィリアム・ダヴェナントが翻案版『マクベス』テキストを出版した時、このダヴェナント版テキストに魔女たちの小唄の歌詞がすべて印刷されたのである。W.W. グレグは、ダヴェナント版を上演していたヨーク公爵一座が王政復古期以前における『マクベス』の「上演台本 (stage-copy)」を所有していたために、この歌詞の復活が可能になったと推定している (Greg x)。

歌詞が判明してからさらに約100年後の1778年、ジョージ・スティーヴンズがトマス・ミドルトンによって1610年代前半に執筆されたと推定される『魔女 (The Witch)』の手稿版テキストを発見し、アイザック・リードの経済援助によってそのテキストを出版した (Esche 13-16)。18世紀を代表するシェイクスピア学者であるスティーヴンズはこの劇作品で魔女たちが歌う2曲の小唄がまさしくダヴェナント改作版に収録されているものと同一であることも気付いていた。ブライアン・ヴィカーズ & マーカス・ダールのような例外はあるものの (Vickers & Dahl 14-15)、今日では第1フォリオの『マクベス』テキストはシェイクスピアの引退後もしくは死去後のある段階で、ミドルトンが創作した新たな登場人物と小唄、ダンスが組み入れられた改訂版だとみなすのが通常である (Clark & Mason 327)。その過程を図表化すると以下の通りになる。

1606年	ウィリアム・シェイクスピアの『マクベス』上演
1613~16年	この期間のある時期にトマス・ミドルトンの『魔女』上演
1610年代末	この期間のある段階で『マクベス』に『魔女』のヘカテ小唄2曲が挿入される。
1623年	第1フォリオの『マクベス』テキストに“Come away, come away, etc”など謎のト書きが出現する。

『マクベス』といえば魔女が登場する劇作品としてよく知られているが、魔女と関わる場面と台詞のすべてがシェイクスピアのオリジナルであったわけではない。ヘカテ小唄挿入説をとる場合には、4.5.1-37、4.1.39-43、4.1.124-31がミドルトンの付加と見なされ (Clark & Mason 329)、当然のことながらこれらの台詞は1606年の初演時には存在しなかったことになる。

2) シェイクスピアのオリジナルと見なされる「三人の魔女」の行動

「3人の魔女 (Weird Sisters/Three Witches)」はシェイクスピアの奔放な想像力によって生み出された登場人物のように感じられるかもしれないが、実際にはほぼすべての部分が『マクベス』の主要材源である『ホリンシェッド年代記』に由来している。

出だしの第1幕第1場において「3人の魔女」はミニ集会 (サバト) を開いて「荒野 (heath)」でマクベスに会うことを確認し、第3場でマクベスとバンクォーを待ち構え、二人に過去・現在・未来の運命を語る (1.3.48-69)。『マクベス』の舞台上で「三人の魔女」によって演じられる一連の出来事は以下の『ホリンシェッド年代記』の記述をほぼそのまま踏襲している。

It fortun'd as Makbeth and Banquho iounied towards Fores, where the king then laie, they went sportng by the waie together without other compaie, saue onelie themselues, passing thorough the woods and fields, when suddenlie in the middest a laund, they met them three women in strange and wild apparel, resembling creatures of elder world, whome when they attetiuelie beheld, wondering much at the sight, the first of them spake and said; "All haile Makbeth, thane of Glammiss" (for he had latalie entered into that dignitie and office by the death of his father Sinell.) The second of them said; "Haile Makbeth thane of Cawder." But the third said; "All haile Makbeth that hereafter shalt be king of Scotland."

(Holinshed Vol. II, p. 266)

マクベスとバンクォーが供回りを連れず、2人だけで国王の滞在地であるフォレスに向かった時があった。森や草原を通りながら進むと、彼らは突然大地の真ん中で粗野で奇妙な装いをしたこの世のものとは思えない3人の女性に出くわした。2人があつけにとられて女性たちを見つめるとそのうちの一人が「マクベス万歳、グラームズの領主様」と言った (というのも父親シネルの死去によってマクベスはごく最近その地位についたからである)。2番目の女性は「マクベス万歳、コーダーの領主様」と語ったが、3番目は「マクベス万歳、いずれ王になられるお方」と言った。

第4幕第1場でも同様であり、「3人の魔女」は魔女たちの「主人 (masters)」である3人の「霊」を召喚してマクベスに対し助言と予言を語るが (4.1.70-93)、その予言の内容も『ホリンシェッド年代記』における「ある魔術師 (cereine wizards)」と「ある魔女 (a certeine witch)」の台詞をほぼそのまま利用したものである (Holinshed Vol. II, 274)。この場面の後半では「3人の魔女」がマクベスに「8人の国王ショー」を上演して舞台上から消えていく

が(4.1.111-31)、一見すると材源などなさそうなこのパフォーマンスでも明らかに『ホリンシェッド年代記』の記述が靈感の源になっている。

『ホリンシェッド年代記』のスコットランド王国史には本来あるべき「マクベス王伝」が存在せず、マクベスの王国統治は「ダンカン王伝」の中に組み込まれている。「ダンカン王伝」は事実上の「マクベス王伝」であり、しかも17年間にわたるマクベス王の統治に関する記述は1050年頃を境として前半部(264-71)と後半部(274-77)の二つに分けられたうえで、その間の2ページ強にわたり「バンクォーとその息子フリーアンス」に由来するスチュワート家系図が延々と解説されている。読者が「誰が誰と結婚して誰が生まれた」という類の単調な記述を辛抱して読み進めていけば、このバンクォーの子孫たちはロバート2世(在位1371-90)からスコットランド王国の相続権を獲得し、以後9名の国王・女王を輩出していることが分かる。さらに読者はこのスチュワート朝の王位継承によってスコットランド王国は長男子単独相続制(primogeniture)のルールを確立させたことも理解できる仕組みとなっている。結果からすると、『マクベス』の「3人の魔女」は芝居小屋の舞台上で、年代記編纂者としてホリンシェッドが果たしていた同じ役割を演じていたことになる。

「3人の魔女」は基本的に『ホリンシェッド年代記』の記述がほぼそのまま台詞へ置き換えられて出来上がった登場人物であるけれども、『マクベス』の舞台で『ホリンシェッド年代記』とは無関係にとる行動が一つだけ存在する。シェイクスピアは第4幕第1場において魔女たちに大釜で不気味なものを煮込ませ、その周りを踊りながら呪文を唱える場面を作り出しているが(4.1.1-38)、『ホリンシェッド年代記』の「魔女」や「魔術師」がその場面に該当するような行動をとることはない。

3) 大釜煮込みの着想はどこから来たのか？

第4幕第1場は「トラ猫(the brinded cat)」、「ハリネズミ(the hedge-pig)」、「ハーピー(Harpier)」という「3人の魔女」それぞれの使い魔(familiar)が呼びかけられる3行の呪文から始まり、その後に「毒の臓物」や「ヒキガエル」など怪奇なものが次々に大釜へ放りこまれていく。

1 Witch Thrice the brinded cat hath mewed.
2 Witch Thrice, and once the hedge-pig whined.
3 Witch Harprier cries, 'Tis time, 'tis time.'
1 Witch Round about the cauldron go;
 In the poisoned entrails throw.
 Toad, that under cold stone

Days and nights has thirty-one.
 Sweltered venom sleeping got
 Boil thou first i'th'charmed pot.
 All Double, double, toil and trouble.
 Fire burn, and cauldron bubble. (Macbeth, 4.1.1-11)

第1の魔女 トラ猫がギャーと三回鳴いた。
 第2の魔女 三回鳴いた、ハリネズミも一回。
 第3の魔女 化物鳥が叫ぶ、「時間だ」、「時間だ」
 第1の魔女 大釜をぐるっと回れ、回れ、
 毒の臓物ぶち込んで。
 お次はヒキガエル、墓石の下で
 三十一日と三十一晩、
 眠って毒を沁みだしたやつ、
 お前が最初に魔法の釜で茹で上がれ。

全員 二倍、二倍、苦しみを濃くしろ、
 薪を燃やせ、大釜を沸騰だ。

「大釜煮込み場面 (cauldron boiling scene)」として知られるいかにも観客受けしそうな設定であるが、この場面で特異な点は大釜という特殊な小道具が使われること、さらにその中で珍奇なものや猟奇的なものが煮込まれることである。

レジナルド・スコットは『魔術の暴露 (*The Discoverie of Witchcraft*)』の第2巻第9節において「魔女裁判官によって魔女の仕業とされる15の犯罪 (The fifteen crimes laid to the charge of witches, by witchmongers)」(Scot 18)を列挙しているが、その10番目に挙げられているのが洗礼前の赤子の誘拐とその肉体の猟奇的なレシピである—「魔女たちは洗礼前の赤子を殺害した後、その肉が持ち運びできるように煮込む (They boil infants (after they have murdered them unbaptized) untill their flesh be made portable)」。魔女が「洗礼前の赤子を邪悪教会に捧げる (offer babies not yet reborn to the Evil One)」行為は典型的な魔女的行為として早くも *Malleus Maleficarum* において明言されており (*Malleus Maleficarum*, Vol. II, 72)、『マクベス』の魔女たちが大釜で煮込む材料にも「娼婦が溝に産み落とし絞殺した赤子の指 (Finger of birth-strangled babe / Ditch-delivered by a drab)」(4.1.30-31)が含まれている。ただし『マクベス』の場合、煮込む材料は赤ん坊にとどまらず様々なものがさながら闇鍋のように煮込まれていく。まず第1の魔女は有毒系の動物を (4.1.4-9)、第2の魔女は爬虫類と夜行性動物の目や舌、羽など体の一部 (4.1.12-19)、そして第3の魔女が「ドラゴンの鱗 (Scale of dragon)」「魔女のミイラ (Witch's mummy)」や「ユダヤ人の肝 (Liver of

blaspheming Jew)」、「トルコ人の鼻 (Nose of Turk)」など、異教徒や異端者たちの身体の一部を次々に大釜に放り込む (4.1.22-34)。

今日では『マクベス』の「3人の魔女」はシェイクスピアの奔放な想像力の所産に思われるけれども、シェイクスピアのオリジナルと呼べる部分はごく限られ、第4幕第1場の大釜煮込み場面における材料とその煮込み方だけがシェイクスピア独自の着想と見なされる。ジョウン・フィッツパトリックの興味深い指摘によれば、大釜煮込みの場面で使われる用語や比喩はアルコール度が高くエリザベス治世において幾度か規制取り締まりの対象になった「ダブル・ダブル・ビール (double-double-Beer)」の特殊な製造工程とその商品名と深く関わっている (Fitzpatrick 48-51)。「二倍、二倍、苦しみを濃くしろ、薪を燃やせ、大釜を沸騰だ (Double, double, toil and trouble./ Fire burn, and cauldron bubble)」という今日では意味不明の呪文もシェイクスピア時代の観客には、蒸留酒並みにアルコール濃度と価格、利益を釣り上げるため、材料煮込み工程を繰り返す醸造業者の掛け声と反復して聞こえていた可能性がある (労力と時間、コストが倍増するため、「途方もなく高い値段で売られて」いた)。

フィッツパトリックの指摘によれば、アルコール濃度をさらに上げるためにイースト菌が混ぜられ、その結果「泡が立つ (bubble)」 (Fitzpatrick 50)。超高濃度ビールは符牒の商品名によって売られ、「ドラゴンのミルク (dragons milke)」とか「狂犬 (the mad dog)」、「親爺殺し (father whoresonne)」など今日の精力剤商品名とよく似た名称がつけられていた。「3人の魔女」が大釜に放り込む「虎の臍物 (a tiger's chawdron)」や「山羊の胆汁 (gall of goat)」もフェアやマーケットの片隅でこっそり売られていたとしてもなんの不思議はない。

エリザベス朝演劇の舞台に魔女はしばしば登場したけれども、魔女が宝塚の輪舞のようなレビュー (revue) を行う作品はごく限られていて、シェイクスピアの『マクベス』とトマス・ミドルトンの『魔女』だけが該当する。シェイクスピアの「大釜煮込み場面」はまさしく謎めいた呪文とダンス、小唄を伴う魔女版スペクタクル・ショーだったが、イメージや修辭のレベルでは魔女のような酒、すなわちすぐ酩酊できるという怪しげな魅惑で表現されていたのである。

『マクベス』テキストにはさらにもう一つの悪魔的／魔女的な娯楽産業のエンターテイメント性が潜んでいるが、残念ながらこちらのイメージや比喩は今日私たちが利用する通常の『マクベス』テキストからは消え失せている。本論の最初の引用で言及した第4幕第1場に挿入された謎のヘカテ小唄 'Black spirits, etc' には売春産業と精力食、催淫剤のイメージが断片的に盛り込まれていた。

[Enter Stadlin and the four other Witches.]

Hecate Give me marmaritin ; some bear-breech. When!

Firestone Here's bear-breech and lizard's brain, forsooth.

ヘカテ 尻だ、尻か脇腹だ。軟膏はどこにある？
ファイアストーン それも取ってくるよ、おっかさん。
ヘカテ もだえろ、もだえろ、おっかさんが呪文をかけている間に。

容器の周りで魔法の唄

真っ黒な霊、真っ白な霊、赤に灰色の霊、
交われ、交われ、交われ、お前たち
ティッティーにティフィン、
漲らせてやりな。
ファイアドレイクにパッキー
いかせてやるんだ、
リアードにロビン、
吐き出しな、お前たち。
ぐるっと廻って踊れ、踊れ、踊れ
悪いのはみんな中に入れ、良いのは出て行け。

第一の魔女 ほら、蝙蝠の血だ。
ヘカテ 放り込め、放り込め。
第二の魔女 ほら、豹の斑だ。
ヘカテ 一つまみ、放り込め。
第一の魔女 蛙の汁に毒蛇の脂
第二魔女 そいつを飲めば若い奴は堪らない。
ヘカテ 放り込め、これでおしまい、あとは悪臭除きだけ。
ファイアストーン いや、赤毛女の肉が残っている。
全員 廻れ、廻れ、廻れ、などなど。

『マクベス』の観客はヘカテとファイアストーンの関係を知る由もないが、ミドルトンの『魔女』でこの二人は実の母子でありながら性的関係をもち続けている (1.2.99-101)。スタドリンなどの悪霊たちはインクス、スクンプスとして17歳になる「ウェルピー市長の息子」(1.2.34)や「太った牧師の娘」(1.2.96)を犯していく。魔女の集団には性的関係の規律がまったくなく、上記の引用においてもゴードン・ウィリアムズの『隠語辞典』が示す通り、ヘカテの小唄には‘mingle’や‘stir’、‘stiff’、‘bob’など性的意味を含む隠語が多用されている (Williams 47, 207, 290, 291)。ヘカテが殺害した「赤毛女」の赤い髪はエドワード・エッシュの註釈によれば当時の観客に「淫乱を連想させ (associated with lechery)」ていた (Esche 264)。今日の私たちには魔女表象に超高濃度ビールの比喩や、売春産業と放縦な性的関係のイメージが潜在的に織り込まれていること自体認識できないが、17世紀初期の観客たちは

即座に禁断の欲望の隠喩をかき取ることができたと思われる。

大釜煮込みについてはエリザベス朝の劇作家それぞれが独自の工夫を凝らしていたが、シェイクスピアとミドルトンには共通する靈感の源が存在していた。ミドルトンが魔女表象に関し『魔術の暴露』の情報に全面的に依存していた事実を最初に指摘したのは1939年に最初の『魔女』編集版テキストを編んだフランク・サリヴァンだった (Sullivan 373)³⁾。上記の引用のうち最初の行で言及される「マーマリティン (Marmaritin)」はスコットの『魔術の暴露』に由来する「霊を呼び出すことのできる (whereby spirits might be raised)」魔法の薬草である (Scot 67)。「真っ黒な霊、真っ白な霊 (black spirits and white)」で始まる小唄に登場する霊の固有名詞もすべてスコットの記述から採られている (Scot 86, 126)。ヘカテ小唄に焦点を合わせて『マクベス』と『魔女』の関係を分析すると遅かれ早かれ袋小路に迷い込むが、レジナルド・スコットの『魔術の暴露』を接線にとってみると、17世紀初期イギリス演劇における魔女表象の生成過程が明確に見えてくる。

4) 「飛行軟膏 (flying ointment)」 レシピの変奏

先に挙げた『魔術の暴露』第2章第9節の引用は魔女が大釜でなにかを煮込むとすれば、シェイクスピア時代の人間が条件反射的に連想するものは「洗礼前の赤子」であったことを示している。ところがシェイクスピアはこの「邪悪教会への貢納物」を材料とはせず、代わりに「トカゲの足 (Lizard's leg)」や「タルタリア人の唇 (Tartar's lips)」など様々な珍奇、怪奇なものを大釜に投入していた。今日の私たちにはこの変更こそがシェイクスピア独自の着想のように思われるが、じつのところ大釜煮込みの怪奇なレシピそのものもシェイクスピアのオリジナルではなかった可能性がある。

魔女懐疑論者の代表であるレジナルド・スコットは『魔術の暴露』第10章において「飛行軟膏」と称されるものに魔女を飛行させる「効力は全くない」と断言する一方 (第9節)、魔女実在論者がパンフレット等で言及するその興味深いレシピを紹介していた (第8節)。

The receipt is as followeth. The fat of young children, and see the it with water in a brazen vessel, reserving the thickest of that which remaineth boiled in the bottome, which they laie up and keepe, until occasion serveth to use it. They put hereunto *Eleoselium, Aconitum, Frondes populeas*, and Soote. (Scot 105)

処方箋は以下の通りである。赤子の脂肪を真鍮の容器を使って水で煮込み、煮詰められ底にたまった濃縮物を然る時まで保存せよ。その濃縮物にはヤマセリ、トリカブト、ポプラの葉、煤を混ぜよ。

この処方箋は「飛行軟膏」の主原料である洗礼前の「赤子の脂肪」以外に、毒薬、薬草系の材料が用いられる例であり、「大釜煮込み場面」の珍奇、怪奇な材料投入の原型とも考えられる箇所である。ただ実際には「ヤマセリ、トリカブト、ポプラの葉、煤」という素材が『マクベス』に登場することはないので、シェイクスピアが上記の引用から影響を受けていたかどうかについては実証できない。

『マクベス』上演から3年後の1609年2月1日にウェストミンスターホワイトホールでベン・ジョンソンの台本、イニゴ・ジョーンズの演出による宮廷仮面劇『女王たちの仮面劇』が上演された。アンティ・マスクとメイン・マスクの二部構成を定式化させた最初の作品である『女王たちの仮面劇』において、ジョンソンはアン王妃と11人の貴婦人が登場するメイン・マスクに対照させ、魔女の「女主人 (Dame)」と配下の11人の魔女によって怪奇性と転覆性が表現されるアンティ・マスクを作り上げた (篠崎 58-59)。以下の引用は「女主人」に11人の魔女たちがそれぞれ怪奇あるいは猟奇的な贈り物を奉げる場面であり、『マクベス』の「三人の魔女」が「タルタリア人の唇」などを大釜に放り込む「大釜煮込み場面」に対応する箇所である。

One Hag	What our Dame bids us do We are ready for.	
Dame	Then fall to. But first relate me what you have sought, Where you have been, and what you have brought.	
First Hag	I have been all day looking after A raven, feeding upon a quarter; And soon as she turned her beak to the south I snatched this morsel out of her mouth.	
Second Hag	I have been gathering wolves' hairs The mad dogs' foam and the adders' ears; The spurging of a dead man's eyes, And all since the evening star did rise.	
	(Third Hag, Fourth Hag, Fifth Hag...)	
Sixth Hag	I had a dagger: what did I with that? Killed an infant, to have his fat. A piper it got at a church-ale, I bade him again blow wind i' the tail.	(<i>The Masque of Queens</i> 124-53)
ある魔女	奥方がお言いつけになったものを	

- 私どもは用意できております。
- 女主人 ならば始めよう。
では教えておくれ、お前たちが何を探し、
どこにいて、何を持ってきたのか？
- 第1 魔女 私は一日中、カラスを探しておりました、
八つ裂きにされた屍肉を喰らってるやつを。
そいつがカアッーと一鳴きしたときに
この肉っ切れをひたたくってやりました。
- 第2の魔女 私はオオカミの柔毛に
狂犬の口泡、クサリヘビの耳
死人の目にこびりついた目ヤニなんかを
宵の明星が出てくるまで探しまわっておりました。
- (第3の魔女、第4の魔女、第5の魔女...略)
- 第6の魔女 短剣持参で出かけ、何をしたとお思いです？
赤子を殺してその脂をそぎ取ってきました。
そいつは村の祭りで生まれ、父親のバグパイプ吹きには
今年も自分のパイプで吹きまくれと命じました。

デイヴィッド・リンドリーが指摘する通り、ジョンソンはアンティ・マスクの台本を執筆する過程で明らかにパトロンの『悪魔学』ではなく、レジナルド・スコットの『魔術の暴露』を参照していた (Lindley 284)。とりわけ「第6の魔女」が語る台詞はスコットが魔女実在論者の誤謬として紹介する「飛行軟膏」の主原料、すなわち「洗礼前の赤子」そのものである。

スコットの『魔術の暴露』がエリザベス朝演劇の魔女表象に与えた影響は大釜煮込みの原料にとどまらない。『女王たちの仮面劇』は魔女の「女主人」を別の魔女たちが鳴り物入り(呪文と小唄、演奏)で天空へ誘うという娯楽的な場面から始まるが、その設定は『マクベス』や『魔女』にも見られる演劇版魔女表象の定式である。

- One Hag Sisters, stay, we want our Dame;
Call upon her by her name,
And the charm we use to say,
That she quickly anoint, and come away. (*The Masque of Queens* 1-4)
- ある魔女 姉妹たち、待っておくれ、奥方が来ていない。
お名前をお呼びしようじゃないか、

いつもの呪文をお唱えしよう、奥様が
すぐに軟膏を塗ってこっちへ飛んでくるように。

『女王たちの仮面劇』の設定で興味深いのは魔女界にもヒエラルキーがあり、女主人が配下の魔女から「軟膏」を塗ってすぐに空中へ舞い上がるように促されることである。これと全く同じ状況が『マクベス』のヘカテ小唄の挿入場面にも出現していることは見逃せない。

『マクベス』の第3幕第5場にはヘカテという、それまでその存在が言及されたことも、舞台上に登場したこともない新たな魔女が突如現れる。そのヘカテが「私の小さな霊 (my little spirit)」と呼ぶ仲間の魔女もしくは使い魔に言及し、第1フォリオの『マクベス』テキストではこの小さな霊が「真黒な雲に乗り」空中でヘカテの飛行を待っている。ト書きによればこの台詞の前後で「舞台奥 (Within)」から‘Come away, come away’の小唄が流れてくる。

Music, and a song

Hecate Hark, I am called: my little sprit, see,
Sits in a foggy cloud, and stays for me. [Exit.]

Sing within. ‘Come away, come away, etc’ (Macbeth, 3.5.33SD–35SD)

演奏と小唄

おや、呼ばれているね。ほら、私の小さな霊が
真黒な雲に乗り、私を待っている。 [退場]

舞台奥から「こっちへおいで、こっちへおいで、など」

第1フォリオでは分からないが、「私の小さな霊」とは猫の使い魔マルキンである。この猫が他の魔女たちと「こっちへおいで、こっちへおいで」を合唱し、ヘカテはこの時点で何らかの形で舞台から消え、舞台奥で合唱に加わる。この台詞が示すのは、演出の上ヘカテをどのように、またどこへ退場させたのかは分からないが、劇世界の設定ではヘカテも「私の小さな霊」たちが待つ宙に舞い上がっていくことである。

『魔女の宅急便』のキキや『魔女の葉草』のマリー、あるいはディズニー産業や『オズの魔法使い』など今日の娯楽産業に登場する魔女の一義的な特性は箒に跨った空中飛行であるけれども、シェイクスピア時代の演劇産業では魔女の空中飛行は複雑極まりない経過をたどって定式化されていった。1606年の初演時には『マクベス』の「3人の魔女」は空中を移動することはなく、箒で大洋を航海するか (1.3.9)、モグラのように地中を移動していた (1.3.79–80)。もともと『マクベス』の魔女たちは『ホリンシェッド年代記』に由来するスコットランド王 (貴族) への予言者であった点、地味でローカルな存在だった。ところがその地味な魔女たちに加えて、歌って踊り、宙乗りをする大道芸人的な「魔女」、すなわちステ

Hecate Now I am furnished for the flight.

[Malkin sings.]

Firestone [Aside] Hark, hark? The cat sings a brave treble in her own language!

(*The Witch*, 3.3.38-62)

小唄

2階からの声 こっちへおいで、こっちへおいで、
ヘカテ、ヘカテ、こっちへおいで。
ヘカテ 行くよ、行くよ、行くよ、行くよ、
大急ぎでいくよ、
大急ぎでいくよ。
スタドリン、どこだい？
スタドリン [2階から] ここにいるよ。
ヘカテ パックルはどこだい？
パックル [2階から] ここにいるよ。
2階からの声 ホッポもヘルウェインもここにいるよ。
足りないのはお前だけ、お前だけ。
おいで、数が揃うように。
ヘカテ 軟膏を塗ってすぐに舞い上がるよ。
[ヘカテ、軟膏を塗る]
猫の霊 [2階から] 降りていくよ、分け前もらうため。
キスして、抱きしめておくれ、吸血鬼。[猫の姿の霊が降りてくる]
なぜぐずぐずしているんだ、
おかしいぞ、おかしいぞ、
天の空気はこんなに甘くきれいなのに。
ヘカテ 降りてきたのかい？
なんの知らせだ？なんの知らせだ？
猫の霊 これからみんなで宴会だ、
来るのかい？ それとも、
来ないのかい？
ヘカテ 飛び立つ準備が今できた。 [猫の霊が歌う]
ファイアストーン [傍白] ほら、ほら、猫語でみごとなソプラノを歌っている。

‘Come away, come away’の小唄にはマルキンの猫小唄やヘカテのソロ小唄という「唄中唄」2曲が含まれるが、実際の舞台で「唄中唄」まで披露されたかは分からない。ただし、魔女が

17世紀初期イングランドの娯楽産業に登場する場合、魔女の親玉は配下の魔女たちの誘いに応じて大空に舞い上がり、その爽快さを演奏や小唄により聴覚的に表現するのがシェイクスピアの『マクベス』、ベン・ジョンソンの『女王たちの仮面劇』、トマス・ミドルトンの『魔女』に共通する定式になる。

娯楽文化史というコンテキストから『マクベス』の魔女表象をとらえてみると、怪奇な大釜煮込みだけでなく小唄と演奏付きのスペクタクルな魔女飛翔ショーにもジョンソンやミドルトンの想像力を刺激した材源が存在していた。魔女の親玉が配下の魔女から誘いを受け、小唄と楽器演奏の鳴り物入りで空中を舞い上がっていくという大道芸人的な着想も疑いなくレジナルド・スコットの『魔術の暴露』に由来する。

Frier Bartholomaeus saith, that the witches themselves, before they annoint themselves, do heare in the night time a great noise of minstrels, which flie over them, with the ladie of the fairies, and then they addresse themselves to their journie. (Scot 106)

修道士バルトロマエウス・スピネウスが語るところによれば、魔女たちは飛行軟膏を塗る前の夜なかに、妖精女王とともに宙を舞う楽師たちの大音響を聞き、それからサバトに出かける準備をする。

レジナルド・スコットは魔女の実在性に関して最も激しい批判を行った人物であり、魔女実在論者の想像力豊かな言説（幻想）を具体的に紹介しつつ苛烈な反論を行っていた。『魔術の暴露』からジョンソンやミドルトンが靈感を受けたのもまさしく魔女実在論者たちが繰り広げた娯楽性あふれる魔女版ファンタジーである。魔女が飛行する際には妖精女王がお出まししてくれ、大勢の楽団が心地よい音楽を奏でってくれる中、レッド・カーペットを歩むスターのように大空へ舞い上がっていく。ヘカテをサバトに誘った「猫の霊」のご先祖はレジナルド・スコットによってバルトロマエウス・スピネウスの発言として伝えられる「楽師たち (minstrels)」、すなわち楽器を演奏できる大道芸人もしくは巡業劇団員だったのである。

5) 結び

今日の編集版『マクベス』テキストではヘカテ小唄2曲が冒頭の1行以外すべて削除されているため、その小唄に込められていた娯楽性そのものが見失われている。従来の文学研究の視座から娯楽文化へと変えてみると、『マクベス』の魔女表象は以下のように経過をたどって形成されている。

1584年 レジナルド・スコット、『魔術の暴露』出版

1597年	スコットランド王ジェイムズ6世、『悪魔学』出版
1606年	ウィリアム・シェイクスピアの『マクベス』上演
1609年	ベン・ジョンソン、宮廷仮面劇『女王たちの仮面劇』上演
1613～16年	この期間のある時期にトマス・ミドルトンの『魔女』上演
1610年代末	この期間のある段階で『マクベス』に『魔女』のヘカテ小唄2曲が挿入される。
1623年	F1の『マクベス』テキストに“Come away, come away, etc”など謎のト書きが出現する。

鳴り物入りサバト参加と大釜煮込みをトピックとする『マクベス』のヘカテ小唄2曲はレジナルド・スコットの『魔術の暴露』第10章第8節・第9節の記述から派生したものであるが、娯楽文化というコンテキストから見ると『マクベス』の魔女表象が直接スコットから派生したわけではない。「3人の魔女」の大釜煮込みやヘカテの小唄と空中飛行という『マクベス』の娯楽性豊かなパフォーマンスはジョンソンやミドルトンの魔女表象を経由することで生まれている。

シェイクスピアやジョンソンの劇作品に関して今日私たちに伝わる情報はテキストという文字媒体を通じてである。必然的に『マクベス』におけるヘカテ小唄の挿入はテキストでたどりうる範囲、すなわちトマス・ミドルトンの『魔女』との関係だけから検討、議論されてきた。ただし娯楽産業の一形態という視点をとってみると、『マクベス』テキストに断片的に組み込まれたヘカテ小唄には宙乗りから音楽演奏、風俗・飲食産業への間接的な言及など多様な娯楽性が詰め込まれていることが判明する。常設の商業劇場であれば、ビジネス戦略から新鮮なレパートリーや上演スタイル、テクノロジーを貪欲に採り入れ、今日の「メディア・ミックス」のように音楽やダンスなど異種の娯楽要素を組み入れるのはある意味で当然の成り行きである。「エリザベス朝演劇」という名称で知られ、主として文学作品として論じられてきた劇作品群は娯楽産業の領域では大道芸やダンス、音楽など様々な要素を取り入れた新たな総合エンターテインメントであったのである。

註

- 1) 台詞／劇世界のレベルでは Weird Sisters だが、ト書きでは (Three) Witches。
- 2) 例外はオクスフォード全集版 (1986年) とオクスフォード・ワールドクラシックス版 (1990年) である。後者では魔女は「第六の魔女」まで登場する。
- 3) 魔女表象関連の材源研究が進んでいる今現在、スコット以外の材源も脚光を浴びるようになってはいるが、近年における『魔女』テキスト編纂者も『魔術の暴露』を中心的な材源と考えている (Esche 33; Corbin & Sedge 15)。

[本研究はJSPS 科研費・基盤研究 B「娯楽文化史からとらえるエリザベス朝演劇—社会変化が生み出す総合エンターテインメント」(研究代表者・篠崎実/課題番号 19H01238)、JSPS 科研費基盤研究 C「シェイクスピア劇の小唄—テキストに埋め込まれた聴覚的連想イメージコード」(研究代表者・中野春夫/課題番号 17K02514/研究期間 H29-H32) 及び JSPS 科研費・基盤研究 C「16 世紀イングランド文学における浮浪者の表象研究」(研究代表者・中野春夫/課題番号 26370290/研究期間 H26-H28) の助成を受けた成果である。また本論における『マクベス』の小唄関連の記述はシェイクスピア祭・没後四百周年記念大会の特別講演「シェイクスピア劇の小唄—艶歌、怨歌、哀歌」(2016 年 4 月 23 日、慶応大学、日本シェイクスピア協会主催・日本英文学会共催) の一部を発展させたものである]

引用文献

- Clark, Sandra and Pamela Mason, eds. *The Arden Shakespeare: Macbeth*. The Third Series. London: Bloomsbury, 2015.
- Corbin, Peter and Douglas Sedge, eds. *The Revels Plays Company Library: Three Jacobean Witchcraft Plays*. Manchester: Manchester University Press, 1986.
- Fitzpatrick, Joan. *Food in Shakespeare: Early Modern Dietaries and the Plays*. New York: Ashgate, 2007.
- Holinshed, Raphael. *Holinshed's Chronicles of England, Scotland, and Ireland*. 6 vols. 1808. New York: AMS Press, 1965. Vol. V, The History of Scotland.
- Jonson, Ben. *The Masque of Queens*. Ed. David Lindley. *The Cambridge Edition of the Works of Ben Jonson*. David Bevington, Martin Butler, and Ian Donaldson, eds. 8 vols. Cambridge: Cambridge University Press, 2012. Vol. 3, pp.281-350.
- Levack, Brian P. ed. *The Witchcraft Sourcebook*. London: Routledge, 2004.
- Lindley, David. 'Introduction' of *The Masque of Queens*. *The Cambridge Edition of the Works of Ben Jonson*. David Bevington, Martin Butler, and Ian Donaldson, eds. 8 vols. Cambridge: Cambridge University Press, 2012. Vol. 3, pp.283-87.
- Malleus Maleficarum*. Ed. & Trans. Christopher S. Mackay. 2 vols. Cambridge: Cambridge University Press, 2006. Vol. II: The English Translation.
- Middleton, Thomas. *A Critical Edition of Thomas Middleton's The Witch*. Ed. Edward J. Esche. New York: Garland Publishing, 1993.
- News from Scotland*. Ed. Lawrence Normand and Gareth Roberts. *Witchcraft in Early Modern Scotland: James VI's Demonology and the North Berwick Witches*. Exeter: University of Exeter Press, 2000. pp. 309-26.
- Scot, Reginald. *The Discoverie of Witchcraft*. Ed. Montague Summers. Suffolk: John Rodker, 1930.
- Sullivan, Frank. "Swathie". *The Times Literary Supplement*, 24 June 1939, p. 373.
- Vickers, Brian & Marcus Dahl. "Disintegrated: did Thomas Middleton really adapt *Macbeth*?" *TLS*. 28 May 2010, pp. 14-15.
- Williams, Gordon. *Shakespeare's Sexual Language: A Glossary*. London: Continuum, 2006.
- 篠崎実「アン王妃の『奇怪なスペクタクル』——『女王たちの仮面劇』をめぐって」、『現代批評のプラクティス 2—ニューヒストリズム』富山太佳夫編、57-87 頁

ENGLISH SUMMARY

Vaudevillian Hecate and the Weird Sisters: The Making of “Witches” in early 17th century English Drama.

NAKANO Haruo

The First Folio text of *Macbeth* (1623) has two mysterious stage directions in which only the cues to the songs Hecate and other witches sing are shown and the remaining lines are cut. More mysteriously, these “Hecate songs” are originally Thomas Middleton’s from his play *The Witch* (the late 1610s), not Shakespeare’s.

This paper aims to point out that the current *Macbeth* text reflects two kinds of representations of witches. The First Folio text of *Macbeth* is a theatrical revision made by Middleton to incorporate the spectacular, as in a Takarazuka show, vaudevillian witches and grotesque “Hecate songs”. Those theatrical witches by Middleton are mainly derived from non-literary sources, such as the business of popular entertainment.

Shakespeare, on the other hand, dramatized a political type of “witches” introduced by Shakespeare’s patron James I through the revision of “Act against Conjuration and Witchcraft” (1 Jac.I. c.12) in 1604. The witches are Shakespeare’s “Weird Sisters”, the three witches in the original version of *Macbeth* derived from historical source Raphael Holinshed’s *The History of Scotland* and King James’s *Daemonologie* (1597).

Key Words: English Renaissance Drama, Theatrical Representation of Witches, William Shakespeare, 17th Century English Entertainment Culture, Thomas Middleton